

移ろうものと変わらぬものと

上うえ廣ひろ榮えい治じ

「世の中が変わった」と誰もが言います。特に社会の変遷を身をもって体験されてきた年配の方ほど、その思いが深いのではないかと思われれます。わが会の中でも、「世の中が変わってしまつて、普及も昔のようにはなかなかいかない」などという声が聞こえてきます。はたして実践倫理は時代に合わなくなつてきているのでしょうか。

たしかに、世の中は衣食住をはじめ生活のあらゆる面で変わつてきました。昔、衣類は家庭で繕つくろい、洗いや張りや仕立て直しさえしたものです。今、仕立て直しはともかくとして、繕つくろいものができる現役の主婦がどれほどいるでしょうか。どこの家にもあつたミシンさえない家庭が増えていきます。

食においても薪まきや炭はとつくに姿を消しました。ガスレンジも使わず、電子レンジで調理のすべてをすましている家庭もあるそうです。

では、住居はどうでしょう。部屋は和室から洋室に変わり、畳を知らない子どももいます。畳の部屋での作法などは、お茶の稽古をした人しか、もうわからなくなっています。

子どもの遊びもテレビゲームの登場以来一変しました。会社の机の上も変わりました。かつては書類が所

狭しと並び、必ず灰皿と湯呑み茶碗が置かれていたものです。今ではパソコンのディスプレイがあるだけです。結婚適齢期とか一姫二太郎という言葉も、もはや死語になりました。離婚も、未婚も、子どもを作らないという主義も、しごく普通のことになりました。世の中は本当に変わったのです。

しかし、皆さんご承知のように、わが会の提唱するところは、六十余年にわたって、まったく変更がありません。

二十四時間営業のコンビニがどこにでもある時代になっても、わが会はあくまで早起きにこだわります。個人が最も大切だという風潮の中にあっても、自分勝手主義を認めることなく、「我も人も人の仕合わせ」を追求して止むところがありません。親孝行は封建遺制だといわれ、離婚や未婚が当たり前の時代になっても、人の仕合わせは家庭愛和に始まって、家庭愛和に終わるのだと説き続けています。

なぜ、わが会は世の中に合わせて変化しようとはしないのでしょうか。わが会の提唱するところが、「それを踏み行なえば、必ず仕合わせになる」不変の王道であるからです。つまり、人が求める仕合わせは、世の中がどのように変わったとしても、その根幹においては、決して変わることはないからです。

例えば、いかにも激しく変化したかみえる衣食住においても、その根幹は「より快適な生活」の追求です。昔も今も、人はより快適な生活を求めて、たゆむことなく生活の改善を行なってきたのです。

「より快適な生活」の追求、それはわが会においても同じなのです。

では、どこが違うのでしょうか。わが会が目指してきたものは「真に快適な生活」の実現です。単なる便利さや効率や流行に流された「仮の快適さ」ではないのです。どんなに便利で効率がよくても、それを受け入れることで「真の快適さ」を損なうならば、私たちはその変化を善しとしません。

例えば、電子レンジだけに頼った冷凍食品の食事と、栄養と美味しさを考えながら心をこめて調理された

食事のどちらが、「快適な生活」という目的に適っているか。答えは言うまでもありません。

あるいは、交通通信の発達も目覚ましいものがありますが、その根幹にある目的は時間の節約です。わが会でも時の無駄を排することで、仕合わせの実現に少しでも近づこうと提唱しています。しかし、それが行き過ぎて、効率万能主義に陥ったり、環境を破壊したり、いかがわしい情報に振り回されることには反対です。なぜなら、それでは真の仕合わせを実現できないからです。

あるいはまた、やはり大きく変化したようにみえる家庭観や結婚観については、どうでしょう。これも答えはまことに簡単です。一人で生きると家族とともに生きると、どちらが本当に仕合わせであるかです。子どもがたくさんいる家庭と、子どものいない家庭では、どちらが仕合わせかを考えれば、答えは自ずと出てきます。

もちろん、個人的な好みというものもあるでしょう。さまざまな個人的な事情もあるでしょう。しかし、人が家庭を営む^{おおもと}大本の理由に着目すれば、何が大切かみてきます。人間は子どもを産み育て、次代に生命をつなぐために家庭を営むのです。「子どもを産み育てる」という大切な目的を達成するために、最も適した形が家庭であったのです。

「銀も黄金も玉も何せむに勝れる宝子にしかめやも」という『万葉集』の歌を学校で教わったことを覚えていると思います。どんな財宝も子どもの大切さにまさるものはない、そう詠んだ山上憶良は今から千三百年も前の人です。

その時代から現代に至るまで、世の中は実にさまざまな変遷を重ねてきました。家庭観や結婚観も大きく変わってきました。しかし何がどう変わろうと、「勝れる宝子にしかめやも」という思いを否定することは誰にもできなかったはずです。いつの時代の親たちもみな、その思いを抱いてきたからこそ、現在を生きる私

たちにまで尊い命がつながってきたのです。

世の中が変わった、家庭観や結婚観が変わったからといって、何で私たちがこの尊い連鎖を断ち切ることができるでしょうか。何の権利があつて、次代を担う子どもを育てるといふ、重大な責務から逃れることができるでしょうか。

もちろん、さまざまな事情によつて子どもを持つことがなかった人たちもいます。しかし、その人たちにも、次の世代を育むといふ責務は残されているのです。自分の人生を通じて獲得した尊い知恵を次の世代に手渡すといふ責務はあるのです。

教育者でもなく、指導的な立場にもない人の場合は、どのようにしてその責務を果たせばよいのでしょうか。それこそ「子供の善導は親の倫理実践から」と同じ方法です。一人ひとりが真摯に誠実に生きることです。倫理を踏んで仕合わせであることです。そんな先人の姿に、必ず次の世代が感応するはずで、「自分もまた、彼のように仕合わせに生きよう」と望んでくれるに違いありません。なぜなら、私たち自身も先輩諸賢の実践の日々に感応して、かくありたいと願つたからこそ、今日があるのです。

世の中がどう変わろうと、人としての仕合わせの根幹が変化するはずはないのです。実践倫理こそ仕合わせを実現する王道だということも不変なのです。軽薄な流行にかぶれて、人として果たすべき責務を放棄してはなりません。責務を果たすには困難が伴います。しかし、それと同時に、このうえもない喜び、人生最大の喜びを与えてくれるものでもあるのです。どうか迷わず自信をもつて、倫理の実践に邁進していただきたいと、心から願つております。

